

思い出・展望の記

恵まれた教育環境の下で

第32代校長（平成16～17年度）

菊谷 一

『松陵を舞う八十の彩色―凌駕する力を今―』から十年。創立九十周年、おめでとうございませう。衷心よりお祝い申し上げます。

赴任した2年間に、能代高校には開校当時の精神が今に生きていると感じられる瞬間がありましたし、同校が地元の多くの方々の温情と声援に満ち溢れた存在であることを確信しました。そしてそれに真摯に応えるように、勉強や部活動はもとより、ボランティア活動をはじめ様々な課外活動へ積極的に参加する生徒の姿に、真の高校生を見た思いでした。愛情溢れる四会の取り組み、慈しみ育てられている様が直に伝わる地区PTA、コース沿道の方々の協力を仰いで実施される夜半の十里強歩大会（これは正に松陵健児の証となるものです）、理数科新設を記念し東京同窓会の助力により植樹された「ニュートンの

木」、松陵会による硬式野球部の輝かしい歴史を綴った「松陵会史」の発行など、思い出は尽きません。

学年2学級で発足した後、7学級を有するまでになりましたが、能代山本地区も少子化の影響を受け、一時1000名を超えた在校生も平成17年度には800名を割り込みました。しかし、学校の活力がいささかも衰えていないのは、創立以来、校訓である「至誠力行」を心の拠り所として、歴史にふさわしい伝統と校風がしっかりと根付いているからでありましよう。教育制度がいかに変わろうとも、各時代の要請を見逃すことなく的確に読み取り迅速に対応された歴代の校長先生をはじめ、教職員各位の先見ある熱心な御指導を随所に垣間見ることが出来ます。それに呼応し同窓先輩諸氏は、校是である「文武両道」の道を邁進し、青雲の志とたゆまぬ努力で県内有数の進学校と言われるに足る実績を残していますし、部活動では毎年、校史に輝かしい足跡を刻んでおります。

白神の山々を望み、数千本の黒松に囲まれ

た自然豊かな高塙の地で学ばれている在校生の皆さんにとって、ここはいつまでも心の拠り所です。この混沌とした時代にあって、新たな歴史を築き上げていくという進取の気概を持ち、松陵健児一人ひとりが、自らの理想の追求に全力を挙げつつ、「樽子山」から「高塙」に受け継がれ築かれた伝統の更なる発揚に努めていただきたいと思います。皆さんの今後の活躍を心から祈念申し上げます。

全ては生徒の幸せのために

第33代校長（平成18～19年度）

井上 高 廣

能代高校には平成18年から2年間お世話になりました。能代高校の卒業生は政治・経済をはじめ各界で活躍し、スポーツの世界でも一流選手を輩出する素晴らしい学校です。このような文武両道で全体的に勇名をはせる能代高校に勤務を命じられた時、私のような者が校長として勤まるものだろうかという不安で、大変緊張して能代高校に赴任したことを覚えています。

実際に勤務して、とても充実し楽しい時を過ごさせていただきました。一番の思い出は、毎日の生徒との面談でした。生徒の皆さま

んには迷惑だったと思うのですが、将来の夢や志を聞く昼休みが楽しみでした。優秀なだけでなく性格も良く意欲的な生徒が多く、希望に胸を膨らませて頑張っていたことを感じます。保護者の皆様が愛情をいっぱい注いで育てられたことを再確認したものです。

在職2年間、能代高校の進学の記録は塗り替わりました。1年目に国立大学合格者がそれまでの最高記録を作り、次の学年は学級減により生徒数が40人減るので、記録を破ることは無理だろうと思っていたにもかかわらず、さらに記録を更新しました。素晴らしい生徒たちであったのは間違いありませんが、この時の教師集団は最高だったと思います。教科の指導力と人間性の両面に優れた方が多く、子供たちを熱心に導いてくださったと感謝の気持ちでいっぱいです。

私は、前任校でもキャリア教育の研究指定を受けていましたが、能代高校でもやるように指示されました。能代高校の優秀な生徒は、キャリア教育によって自分の将来の生き方目標が決まれば学習に対する意欲が増し、進学実績も飛躍的に伸びると考えていました。しかも生徒の将来にも必ず良い影響を与え、地域や日本のみならず世界を導くような人間になって欲しい、できればその目的のために強い「志」を持つてほしいものだと思います。このキャリア教育が一応の成果

を上げたのは、先生方の頑張りはもとより、各界で活躍される卒業生の講話やインターンシップのご協力なくしてはできないこと、皆様に心から感謝申し上げます。

運動部の練習もよく見に行きました。野球や体操、柔剣道はじめ多くの運動部の活躍だけでなく、将棋や弁論、無線など多くの分野で能力をいかんなく発揮し、生徒は互いに刺激しあうことの意義を強く感じました。人間が世の中を生き抜いて活躍するには、優秀だけでなく精神的にも肉体的にも強さが必要です。その意味からしても文武両道で活躍する能代高校が好きでした。素晴らしい指導者が多く、生徒は厳しい指導の中でのびのびと活躍し生き生きとしていました。

創立九十周年おめでとうございます。能代高校のさらなる発展を祈念しています。

共に夢を語ろう

第34代校長（平成20～22年度）

山 本 達 行

能代高校には、教諭・教頭・校長と立場を変えながら、通算13年お世話になった。進路指導やクラス経営に夢中になっていた教諭時代、「楽しい学校」と「進路実績の向上」を

両立させようと教員同士で競い合っていた。アイディアの人、精神論の人、そして腕力の人、それぞれに自分の強みを生かして戦っていた。思うような成果が上がらず苦しい時期も多かったが、耐えることができた。課題に挑戦することの楽しさと「何かを期待する生徒」を見いだしたからである。そして、先生の挑戦こそが生徒への一番の激励であり教えるであることを学んだ。取り組みの成否に関わらず、生徒は挑戦する先生を待っている。

私は、いつからか「楽しくなければ学校でない」と思ってきた。しかしあるとき、「楽しいだけでは意味がない」と卒業生の涙に教えられた。生徒が高校に求めるものは多様であったとしても、自分の能力を高め、可能性を追求したいという思いは共通である。時に辛い思いをさせ忍耐を強いたとしても、自立した社会人として生きる力、己の目標に向かって歩む能力を身につけさせることは、能代高校の使命であると思うようになった。やはり、自分の命の使い道を考えさせ、「至誠力行」の生き方とそれを実現するための能力を身につけさせるという、学校存立の根本を忘れてはならないと自らを戒めた。

教頭として赴任し、井上高廣校長から学校活性化プロジェクトを持ちかけられたとき、真っ先に浮かんだのはこの理想の学校作りであった。求められる人間像や学力を分析し、

人作りと学力向上を目的に志と意欲を高める取り組みを構想した。校長として赴任したのは、プロジェクト実施2年目である。見えてきた最大の問題は、志や意欲を高める取り組みと授業とが上手くリンクしないこと、進学実績との関係が見えにくいことであった。様々な工夫や検討を加えながら成果の実感を模索したが、私の代では明確にできなかった。

その後の詳細は解らないが、厳しく困難な状況が続いていると人づてに聞いている。しかし、理想を見失ってはいけない。苦しい中で教員の踏ん張りが生徒に勇気と意欲を与え、新しい能代高校作りの出発点となるのである。かつて、先輩教員から教えられた言葉、「苦しくなったら生徒を見よ、迷ったら生徒に聞け」は至言である。そして、「生徒と共に夢を語ろう」と言いたい。十年後の夢を。

歴史に感謝

第35代校長（平成23～24年度）

佐々木 正 一

教諭として能代高校に勤務しはじめた頃は50分授業で6校時までであったが、平成元年からは65分授業で5校時までとなった。1コ

マの授業時間を延ばすことによって、生徒の意識改革を図り、授業の内容を充実させることにより、学力の向上につなげる意図であった。その後、学校週五日制の調査研究協力校に指定され、新学習指導要領の実施などの環境の変化に対応するため、平成6年度からは50分授業に戻った。ただし、7校時目が自由選択になり、3～5単位の範囲で選択できるようになった。人事異動で転出したあとの平成12年には55分授業、平成16年には50分授業週1日のみ7校時というように、その時々課題に対応するために変化してきた。校長としてしばらくぶりに能代高校に戻ったら、45分授業7校時（35単位）で教育課程が作られていた。この45分授業を軌道に乗せることが大きな使命であった。ただ単に5分短くなつたということではなく、これまでの授業時間の変遷によって能代高校に根付いてきた授業スタイルをより濃縮させて、時間を有効に活用するようにすることである。教員・生徒とも、大きな意識改革になったと思われる。ここ二十数年で、1コマの授業時間は変遷を繰り返しており、正解はないのかもしれないが、文部科学省の「50分を標準とする」ということが原点であることは間違いない。

同窓生の皆様には、この間、生徒の支援に尽力頂き感謝している。無線部や理数科の課題研究によるロケット甲子園など、海外での

大会に参加する生徒の旅費などの支援として基金を立ち上げてくださり、生徒の活動を支援して頂いた。高校生の国際交流は拡大の一途であり、今後とも支援をお願いしたい。また、吹奏楽部の定期演奏会では、同窓生に参加を呼びかけたところ、様々な世代から沢山の同窓生の方々から賛同を頂き、総勢百名近い人数で行うことが出来、大成功であった。これがきっかけとなったのか、吹奏楽コンクールに於いては、秋田県大会、東北大会でいずれも金賞を獲得するという偉業を成し遂げた。これらは、一例に過ぎないが、様々な場面で生徒を支援頂いた。この地方の子供の数は、現状から増えることは叶わないため、次の周年行事の際の生徒数は容易に想像できる。ますます同窓生の支援が重要になってくると思われるので、今後とも支援をお願いしたい。

熱き青春の舞台…能代高校

第36代校長（平成25～26年度）

一 関 雅 裕

創立九十周年、誠におめでとうございます。この長い歴史において、いつの時代も保護者の皆様、地域の皆様に支えられながら、一

人ひとりの生徒が「見えない季節」青春」を模索し続けたであろうことに思いをはせるとき、学校が歴史を刻むことの意味の大きさに圧倒されてしまいます。

日本は今、もう一度元気をとりもどすべく各界・各分野で文字どおり苦闘が続いています。この5月、「東北六魂祭」の会場となった秋田市には、全国から26万人もの人出があり「心はひとつ、さらに前へ」の合い言葉のもと、東北再生への誓いを新たにしました。

元気をとりもどす……とは言っても、過去の日本に、過去の秋田にもどることはもはやあり得ません。何ものか新たなもの……それはコミュニティであったり、生き方・在り方、仕事・産業、家族・生活様式、社会の仕組み等々、ありとあらゆるものを創り出していかななくてはならない時代になりました。お手本はありません。

在職させていただいた2年間、必死になって勉強に取り組む生徒の姿、部活動に取り組む生徒の姿、学校行事に取り組む生徒の姿、そして生き方・在り方を模索しながら苦闘する生徒の姿に触れることができました。いつしか「君たちこそが日本の希望の光」との思いが湧きあがってきたものです。現役の生徒諸君には夢と志をもって大きく成長してもらいたいと思いますし、そのために「今」を充実させてもらいたいと願っています。仕事を

する……それがどんな場所であろうと、「人のために何かをしようという志」を持ってほしいと願います。

学校の歴史とは、そこを学舎とする生徒一人ひとりの青春の積み重なりであるからこそ、かけがえのない歴史なのだと思います。今後とも能代高校には、熱き青春の舞台として輝き続けてもらいたいと願っています。

いつまでも応援しております。
輝く能代高校、永遠なれ。

思い出、そして夢

前同窓会長（25期）

田中 仁 純

同窓会顧問は佐々木満氏（15期）と田中（25期）の2名です。佐々木満氏は永年国会議員として活躍された方ですから誰もが知っておられると思います。同窓会の規約に「会長は若干の顧問を委嘱する。顧問は任期2年とし、会長の諮問にこたえ、その要請により重要議事に参加する」とあります。その資格については触れておらず、私は会長経験者として委嘱されたものと考えております。

同窓会のスタートは第1期生が卒業された昭和5年となっております。会長は校長で

あった武藤健三郎先生が務められており、昭和21年、吉武栄一氏（1期）が就任するまで歴代校長が会長であったようです。牧野茂治氏（2期）佐藤憲一郎氏（3期）平川正司氏（4期）が副会長でした。その後新制高校となり、生徒数の増加に伴って新制から副会長を、ということで加藤寛衛氏（25期）が補充されました。加藤氏が都合があり辞められた後釜に田中が推されたのでした。九十周年を迎えた時期にあたり、吉武会長当時から同窓会役員として、その推移を見届けているのは自分一人のような気がします。吉武会長逝去により19期の神馬恒成氏が二代目会長に就任、大塚繁夫氏、花下哲夫氏、伊勢真佐見氏等が副会長におられました。吉武会長は創立からの基盤固め、二代目神馬会長は組織の強化をはかり「松陵」の新時代を築き年会費制度を決めたり、高埕への校舎移転により多くの費用を要する事業を遂行し、同窓会員の意気もあがり、協力金も多く寄せられました。また年会費の初年度は700万円近い額の協力があり将来にむけて大いに希望を抱かせてくれたものでした。その後を引継いだ田中は、バブルがはじけたあとであり、冷えた期間で徐々に失速を余儀なくされました。「松陵」も配布制限を検討された頃もありました。また学級減による先生の配置もきびしくなり、学校側におんぶしていた同窓会活動が自

主運営に迫りこまれたのもこの時期でした。現在の事務局スタッフの頑張りにより順調な運営に至っていることは喜ばしい限りです。いま母校は創立百周年に向かっています。同窓会も四代目森田新一郎会長のもと学校を助けて、文武両道を貫き、グローバル社会へ勇気をもってたち向かう気構えを胸に、進学校として誇りある実績を残してくれる後輩に大いなる夢を託したく思うのです。誇り高き松陵健児に栄光あれ!!

蛍雪四年間の思い出

定時制2期 住吉 新作

私たちの小学校時代は戦時一色で、必ずしも十分な勉強は受けられなかった。幸い昭和23年6月「教育の機会均等!」が叫ばれ、定時制課程が附設された。私は新しい教育の期待と将来を考え、率先し県立能代南高校(現在の能代高校・能代市文化会館の場所)へ入学した。(二ツ井、藤琴、常盤、八森に分校もあった)

年齢、職業は関係無く向学心に燃え、集まった生徒約150名は、それぞれ3教室に分かれ学業にいそしんだ。教職員は定時制専任は少なく、全日制の先生も兼務していた。

敬称は省かせていただくが横川半治(主事)、柳谷了因(国語)、谷内卯吉(英語・書道)、山崎富之助(音楽)、船山仁(保健体育)、市川嘉宏(地学)、大高芳雄(数学)、嶋津健介(世界史)、塚本昌久(数学)、北嶋和信(工業)、ご指導を頂いた諸先生のお顔が今も浮かぶ。私たちは春夏秋冬、雨の日も風の日も職場の仕事を終え、教科書を小脇に抱え樽子山校舎へ急いだ。疲労のあまり授業中は居眠りすることしばしばだった。

働きながら4年間、それは容易ではなかったが、職場の理解と同志の連帯で私たち17名(中心校)は、予定通り卒業できた。厳肅な卒業証書授与式では高らかに校歌を歌い……わが胸に新たな希望を抱き、感激と喜びでいっぱいだった。

あれから六十五年

24期 柴田 郁

運がいいのか悪いのか、私の高校入試と能代南高校(次の年に現在の校名となる)が男女共学実施元年と重なりました。そして私は、プラタナス並木の美しい樽子山の木造校舎へ進学しました。戦争放棄や、男女同権が明記された現憲法が施行されたのは1947

年でしたので、それから4年後のことです。まだ世情は安定せず食べることが精一杯の貧しい時代でしたから制服などは無く、持ち合わせのものを着て、しかもほとんどの生徒は下駄ばきでしたが、志だけは高く持っていました。

このような状況の中で、女性第1期生36名は、世間の注目を集めてのスタートでした。好奇の目と期待感の渦中で、一挙一動が束縛されているような誠に窮屈な3年間であったような気がします。また、準備の整わないままに受け入れた学校も戸惑いや気苦労が多かったに違いないと感謝しております。

でも、だからこそ成長できたことも沢山ありました。困難を克服する力、協力と切磋琢磨の大切さ、可能性への挑戦、先輩や後輩の人間関係、女性の自立などです。失敗を許されない自覚と責任感で、張りつめて過ごした有意義な青春だったと思っています。

教師として社会へ出てからは、「女のくせに」との戦いも多く、まだまだ女性なるが故に突き当たる壁は厚く高く多様でしたが、周囲の方々に支えられてどうにか無事乗り越えることができました。

さて、退職後の20年は、小さくともみんなの為になるボランティアと、男女共同参画やジェンダーなどの実践と学びを体験することができました。

そして傘寿を迎えたこれからは、「無理せず急がずはみ出さず、力まずひがまずゆったりと。」を心がけ、水の流れの如く自然体で生きていきたいと思っております。

親子、孫、兄妹9人もお世話になった母校の九十周年、おめでとうございます。

根性無し（こんじよなし）

28期 石川 輔 宏

「んがだばどさこんじよあらたな あねの〜」タケジュウ（武田重蔵）先生の甲高い声がバレーコートに響く、昭和32年7月恒例の夏期合宿である。練習開始から、かれこれ一時間は一人でスパイク（当時はキルと呼んでいた）を打ち続けている。昔の中衛のスパイクはジャックナイフ打法（ジャンプしてから大きく仰け反り身体を「く」の字にしてボールを打つ）が主流で、この打法を徹底して叩き込まれていた。私をスパイクマシンにしてのブロックとレシーブの練習は攻撃、守備両方の上達を狙った一石二鳥の練習方法であった。

しかし、そのスパイクマシンが途中でへたばり始め、ネットにぶら下がりコートに這い蹲る……タケジュウ先生の気合が入る、「全

員、うさぎ跳びコート5周、グラウンド駆け足」となる。身体のケアも今とは全く違って、練習中は水を飲むな、肩は冷やすな……。今は酷使した肩はアイシングする、そして、根性を鍛えると称して科せられた「うさぎ跳び」は膝を壊すとして最近のトレーニングには余り取り入れないと聞く、等々……スポーツ界に於いても今昔の感を否めない。今となれば懐かしい思い出として語れるが、練習は厳しく大変苦しいものだった。



左から2人目の選手が当時の「ジャックナイフ打法」をしている石川選手
昭和31年5月27日 県北大会（大館桂高校コート）

なんとか合宿は終わったものの右足甲に故障を抱えたまま仙台での全国大会を迎えた。

前年度優勝校の重荷を背負っての試合はやはりどこかに緊張があったのだろう、1回戦の対戦相手は名門「岡山東商業」、試合は纏れにもつれ3セット2点差での勝利、その後は落ち着きを取り戻し、新聞記事にもある「能代高校破竹の勢い」の通り決勝まで勝ち進んだ。決勝は広島県の強豪「崇徳高校」との対戦となったが、力及ばず準優勝、悔しかったが、優勝時の3年生が6人も抜けた新メンバーとしては良くやったと思っている。

9月に入り、国体の東北予選が青森で開催された。この大会では全試合1セットも落とさず東北完全制覇を成し遂げ、前年度の屈辱を晴らすことが出来た。また、この青森大会を旧富士製鐵（後新日鉄）の監督が見ていたらしく就職の声が掛かり、私にとって人生最大の岐路となった忘れ得ない大会でもあった。

静岡で開催の第12回国民体育大会には、東北代表として出場し、準決勝で強豪「藤沢高校」と対戦、敗れたもののバレー部としては初めての国体3位入賞を果たした。そして気が付くとタケジュウ先生から「こんじよなし」の言葉を聞かなくなっていた。きつと評価してくれたのだろうと勝手に思い込んでいた。

この度、記念すべく創立九十周年の記念誌への寄稿を機会に、日々の苦しい練習を見事

な根性で耐え抜き、栄誉ある成績を残した同期の仲間の名前をここに記させていただく。大久保征輝君（FR故人）、三熊東洋君（FCキャプテン）、八木俊雄君（HC故人）石川輔宏（HL）、森岡宏文君（BC）、山本友厚君（BL故人）、信坂吉秀君（マネジャー故人）。スター選手も居らずどちらかと言えば寡黙で黙々と努力するタイプの仲間達であった。この苦楽を共にしてきた懐かしい「七人の侍」仲間も4人が鬼籍に入り、現世でこの記念誌を読んでもらえず残念だが、天国にもこの思い出話はきっと届いていると信じたい。

最後になりましたが、能代高校創立九十周年記念おめでとうございます。母校の益々のご発展と皆様のご健勝を心よりお祈り申し上げます。

遠き思い出

33期 石原 恵美子

創立九十周年、心よりお祝い申し上げます。私も今年、古稀という節目にあたり、能代高校の思い出を述べる原稿依頼を、何かのご縁と思い、お引き受けしました。

卒業以来、早五十数年を経て、記憶も定かでない点は、お許し頂きたいと思えます。

昭和35年、高校へ入学した時は、私達女子生徒は、12名でした。1学年の5クラスの内、女子は3クラスのみでした。2、3年生合わせても、二十数名。女子全員の名前は、すぐ覚え、先輩女子には仲よくして頂き、結束力も強まりました。現在の母校の女子数は、全体の半数以上と伺い、隔世の感がありますと共に、女子力に期待を致します。

当時、私は汽車通学でした。能代駅は市内5校の高校生であふれておりましたが、女子校の北高前を通り過ぎ、樽子山を登る坂は、数名の生徒で、裏門へ入るのは、心細く感じました。グラウンドを右手に眺め、女子の更衣室は狭くて暗い場所にありました。それでも、女子だけのおしゃべりの短い時間、ホッとしたものです。教室には、古い窓ガラスに能中のマークの入った歴史を感じさせる木造校舎、黒い詰め衿の学生服に、坊主頭の汗臭い男子。一瞬、足を踏み入れるのをためらいました。それもやがて慣れて、文武両道の校風にも、馴染んできました。沖田校長は、能代、大館鳳鳴、横手の3校で模試の成績を廊下へ貼り出し、一喜一憂をし、野球の応援に女子も必ず参加する事、体操のインターハイの優勝で、中村先生の熱心な指導の姿が、目に浮かびます。部活は、女子は卓球部か、図書部です。大半は図書部に属し、帰りの列車時間まで、図書館で過ごしました。結婚後、

家庭に入っても、読書会に誘われ、続けてこられたのも、高校時代の図書部のお陰かと思えます。

同人誌十号まで発行し、白鳥先生にもお贈りし、「三号同人誌が多い中、頑張ってますね。」と励まされました。汽車通の頃、同じ駅で降り、私達は寒い冬空に早速うつ向き歩いてみると、雪降る空を見上げ、「雪はきれいですネー」とロマンチストな文学者のお姿がしのばれました。

大沼先生は、よくカメラを首から下げ、学校行事や、修学旅行等で生徒達の写真を撮っておられました。後年、海外旅行をされて撮った写真を見せて頂き、「素敵なおングルですネ」と話に花が咲きました。私も趣味で、絵画同好会に入り、三十周年展の作品発表をグループで計画し、下手でも長く続けられて幸いです。同期の小林勝平さんに、大沼先生の墓参りの機会を頂き、主人共々、お花を手向ける事ができ、感謝致しております。

東京同窓会で、南極越冬隊長の工藤栄氏の講演会での成果を伺い、偶然にも、若き日に短期間でしたが、国立極地研究所に勤務した事がある私も、後輩の皆様のご活躍をうれしく思いました。今後も母校の益々の発展と、ご活躍をお祈り致しております。